

新屈曲処置具を使用した大腸ESD：生体ブタ大腸における比較試験

岡本，康治

<https://hdl.handle.net/2324/4110422>

出版情報：九州大学，2020，博士（医学），論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名：岡 本 康 治

論 文 名：Colorectal endoscopic submucosal dissection using novel articulating devices: a comparative study in a live porcine model
(新屈曲処置具を使用した大腸 ESD：生体ブタ大腸における比較試験)

区 分：乙

論 文 内 容 の 要 旨

【背景・目的】大腸における内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は時間がかかり穿孔のリスクが高い。この研究の目的は、生体ブタ大腸における新屈曲処置具と従来の ESD 用処置具の安全性と有効性を比較することである。

【方法】生体ブタ 10 頭の 3 つの異なる部位（肛門から 15cm、25cm、35cm）に対して、従来の方法（n=15）と屈曲処置具を使用した新手法（n=15）を用いて計 30 病変の ESD を行った。施行時間、偶発症（穿孔、出血）、筋損傷を記録し、病変の単位面積あたりの ESD 施行時間を計算した。

【結果】従来法の穿孔率 6.7%（1/15）に対し、新手法の穿孔率は 0%（0/15）であった。筋損傷の数は、従来法より新手法で有意に少なかった（6 vs. 37; $P=0.024$ ）。平均施行時間は新手法で有意に短かった（ 4.6 ± 2.0 vs. 7.1 ± 4.1 min/cm²; $P=0.042$ ）。

【結論】新屈曲処置具を用いた ESD は、偶発症を減らし、切除時間を短縮する。